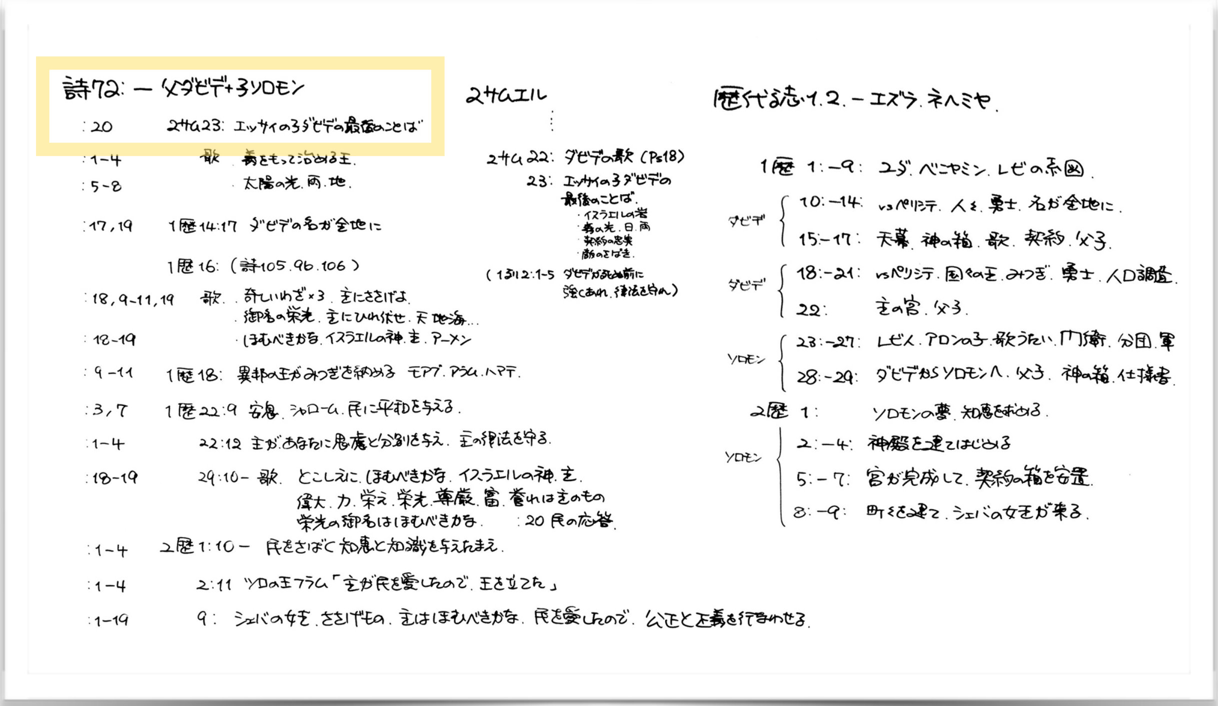
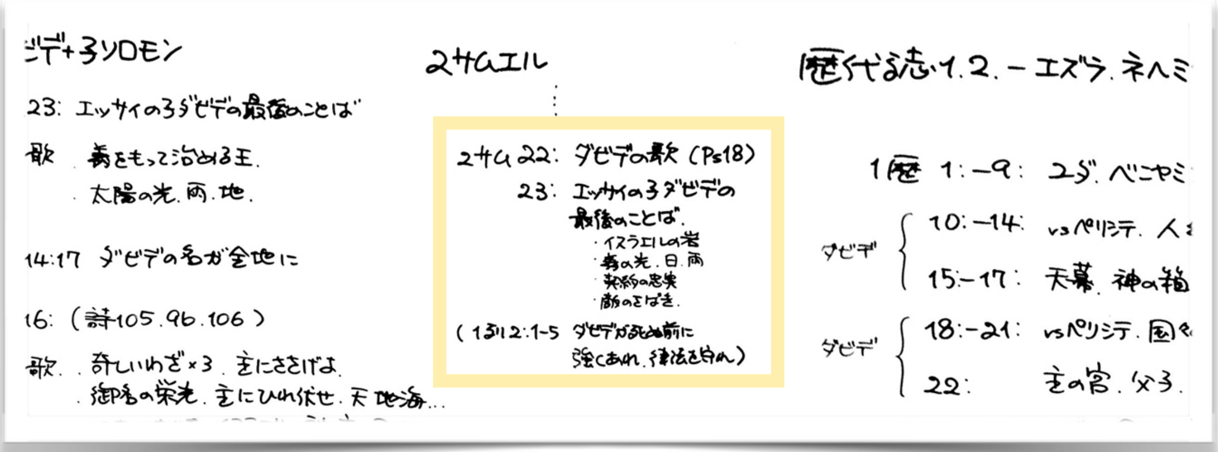
詩篇72篇



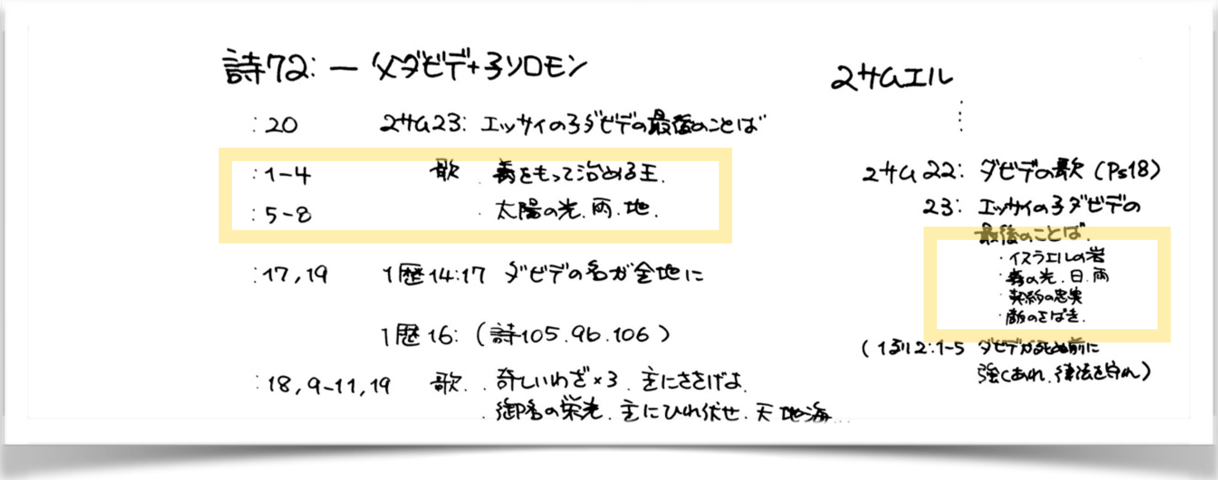
詩篇72篇を分析して、第2巻の終わりのアンカーになっているところですね。「ほむべきかな。神、主、イスラエルの神。ただ、主ひとり、奇しいわざを行う。とこしえに、ほむべきかな。その栄光の御名。その栄光は地に満ちわたれ。アーメン。アーメン。エッサイの子ダビデの祈りは終わった。」



「エッサイの子ダビデの祈りは終わった」ということを聞いたら思い出さなければいけないだろうというところは、第2サムエル23章。第2サムエルの終わりのところ(22章)は、18篇が入っている「主は岩」という詩篇です。それで23章は、それに続いている祝福のことばです。「これはダビデの最後のことばである。エッサイの子ダビデの告

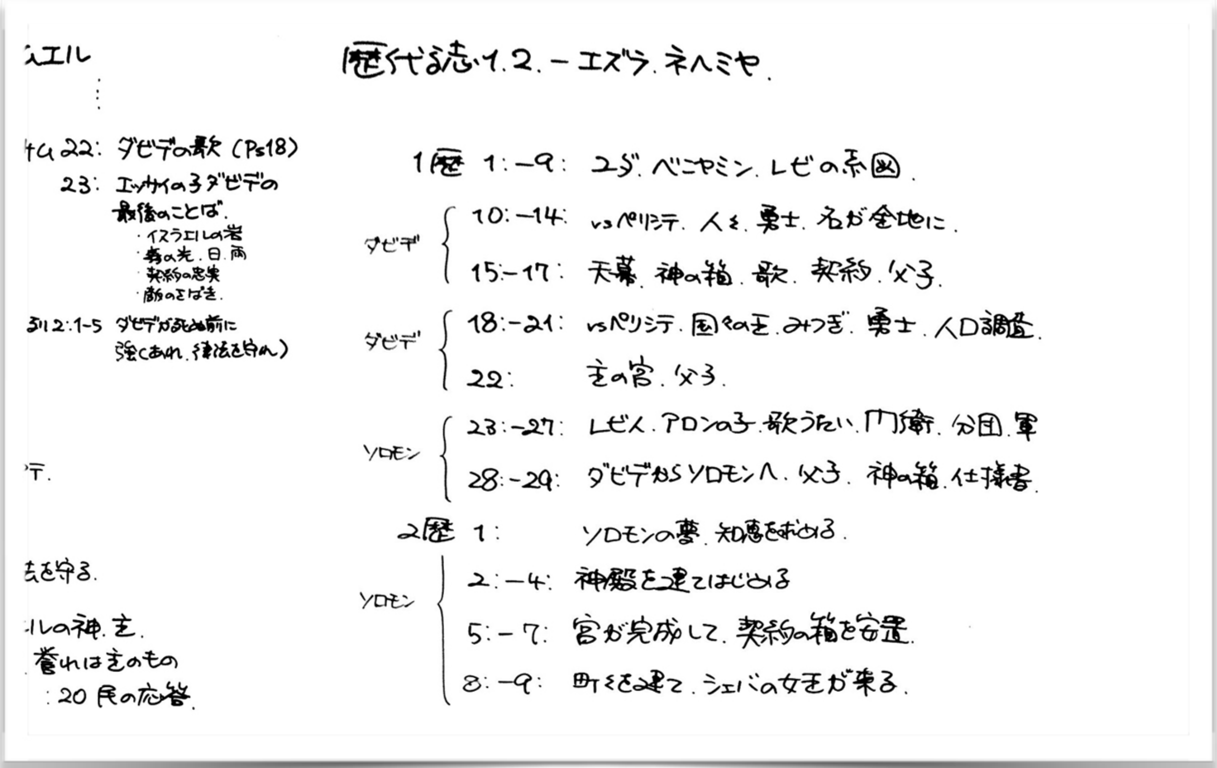
げたことば。高くあげられた者、ヤコブの神に油そそがれた者の告げたことば。イスラエルの麗しい歌。」と言って23章に歌が書いてあります。

これは、申命記の最後のモーセの歌、モーセの祝福のことばに似ています。次の第1列王記のところで、「強くあれ、雄々しくあれ」、これは死ぬ前にということで、これも最後のことばになりますけれど、特にここ(第2サムエル23章)にモーセの最後の歌のように、ダビデの最後の歌が記録されています。



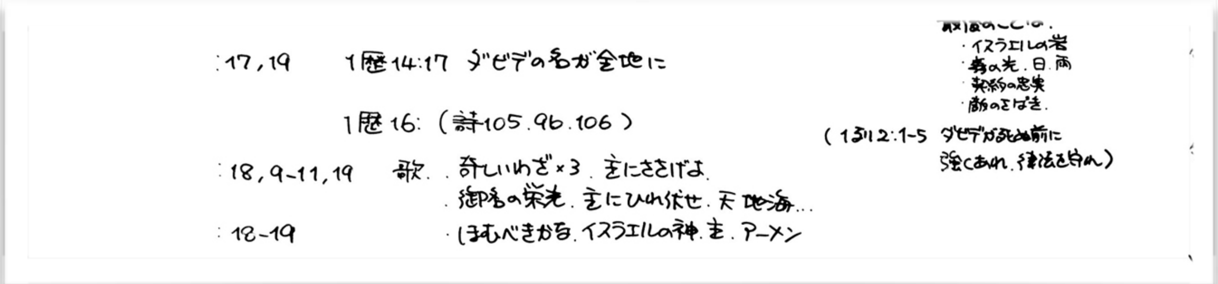
そこには(第2サムエル23:3〜)、「義をもって人を治める者、神を恐れて治める者、太陽の上る朝の光、雲一つない朝の光のようだ…その栄光が照り輝かされている。その契約はとこしえに。」そして、6節7節で、「よこしまな者、敵は打ち砕かれる」というような内容になっています。これを覚えていなければいけない、もしくは覚えているはずのソロモンによる72篇の終わりのところです。

その最後のことばを見ると、72篇は公正な裁き、義をもって裁く、その王を与えてください、その公正の知恵を王に与えてくださいというところで始まり、その栄光が全地に満たされているというのが72篇ですので、このエッサイの子ダビデの最後のことばということを思い出すように、72篇の最後にもエッサイの子ダビデの祈りの終わりということが書かれているのだと思います。



特に歴代誌の中で王と祭司がイスラエルをどう導いているのかということが記録されています。列王記のほうは王の歴史、歴代誌のほうは祭司の歴史というふうに分けられたりしますけれど、歴代誌のほうは王と祭司がいつも一緒に出てきて、神殿でどうなっているのか、神殿が捧げられているとか、天幕で歌を歌うとかいうようなことがずっと記録されています。

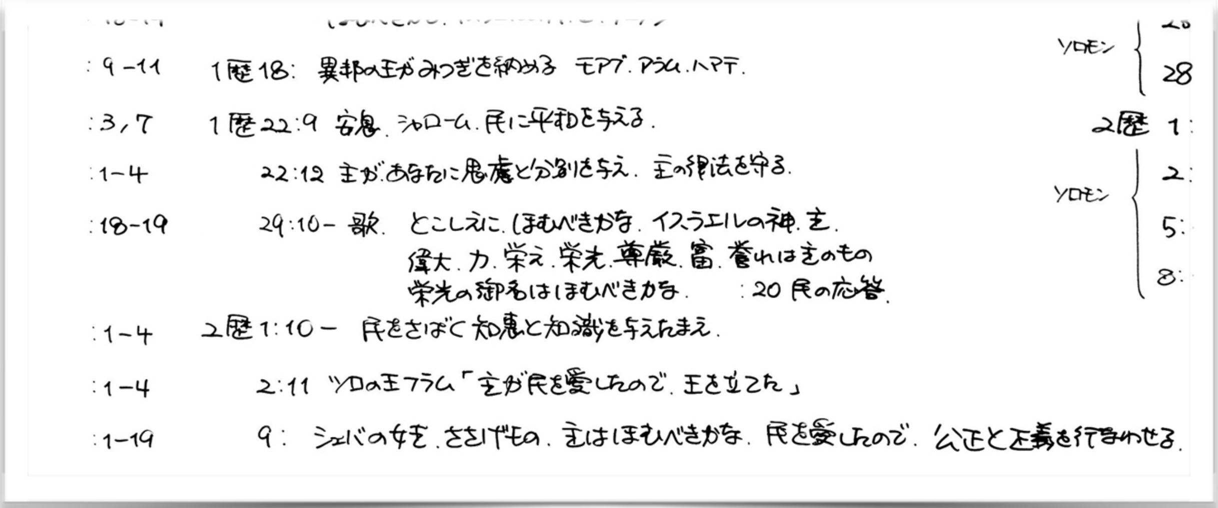
その記録の中でのダビデとソロモンの働き、それを特に9章に（書かれています）。父ダビデとその子ソロモンの働きの支配のことを歴史と一緒に、72篇と歴史・歴代誌の中に出てくるものを一緒に見てみると、なるほど72篇はダビデとソロモンに与えられた民を治める責任が民を正しく治める知恵のある王様が与えられたのだということがよくわかるものだと思います。



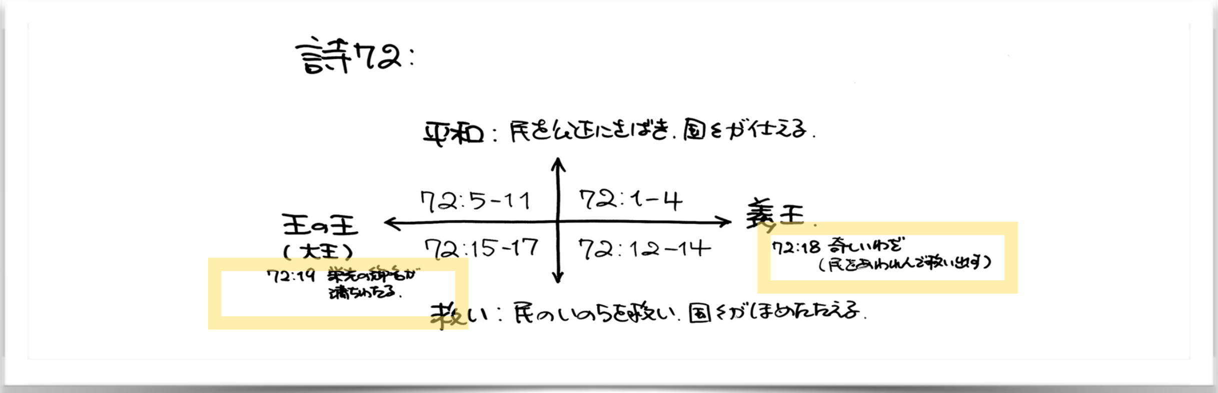
第1歴代誌の16章には、105篇と96篇と106篇が(あとで別れたと思うのですけれど)その詩篇も入っています。その詩篇の最後のところが、「ほむべきかな。イスラエルの神、主、とこしえからとこしえまで。」奇しいわざを行う、主に捧げなさい、御名の栄光というのは72篇にずっと出てくるところです。

それで、王様が治める、知恵を与えてくださいと頼む。それは、ダビデが言っています。モーセがヨシュアに言ったように、ダビデはソロモンに知恵が与えられるようにと

あらかじめ祈っています。そのことをわかっていてソロモンは知恵を与えてくださいと頼む。



それが全世界に広がっていっているので、シェバの女王は捧げ物を持っていきます(第2歴代誌9章)。主は、ほむべきかな。民を愛したので王を与えた。公正と正義を行わせるその王が与えられたのはどんなに幸いなのか、というシェバの女王の9章のところに、その成就が現われている。それを全部短く説明してくれているのが72篇です。



72篇を4つの段落に分けられるでしょう。貧しいものを憐れむ義の王であること。その王の支配が全世界に満ちわたる王の王であること。それと、特に民を裁いて国々を従わせるという平和の支配の側と、民のいのちを救って国々が賛美するという救いを賛美するものとに分かれていると思います。

この義の王というほうは、72篇の長いほむべきかな、2巻の最後の長いほむべきかな。奇しいわざを行うことと、とこしえに栄光の御名があらわされるというその二つのことが、特に奇しいわざ、民を憐れんで救い出すというのは、第一歴代誌16章のところからもわかるように奇しいわざということは、そのことをあらわしている。救いのわざ。

それで後半の、それを見た王たちがその栄光の御名が全世界にあらわされているということですので、72篇の「ほむべきかな」の前半と「ほむべきかな」の後半で構成されているということです。

それでここは17節までです。18節と19節は全体のアンカーになっている形の、2巻のまとめであると同時に、72篇のまとめが18節と19節の短い言い方の中にあると分析しましたね。

神殿での祈りについては、第3巻、第4巻と一緒に見なければいけないということは、この歴代誌の概略を覚えておかないといけないということになると思います。

72篇は、父ダビデとその子ソロモンが知恵をもって、愛をもって民を愛し、導いてその栄光がとこしえにあらわされるというメサイアのひな型の詩篇であるということです。